新人看護職員研修事例

南東北グループ・新百合ケ丘総合病院 看護部の教育実践

京都科学は現場からのフィードバックを通して、メーカーとして学びます。

〈新人看護師研修に関して〉

新人看護師は入職してから3か月間、病棟に所属せず研修を受講する。よく行われている病棟などでのローテーション研修は採用していない。内容は、看護技術、倫理、医療安全、コミュニケーションスキル、コーピング、医療職という職業に適したメークアップ講座（男性はスカルプケア講座）などである。

■学習者視点＝「ああそうなのだ」と気づく

看護技術では、オンラインの看護技術教育ツールを使用し、看護手順を知識として論理的に理解する。そしてシミュレータを使用した演習で「ああそうなのだ」と気づき、その気づきの意味を再度学ぶことで臨床での看護に結びつくようにしている。

具体的には、シミュレータを使用して演習している様子を撮影し、チェックリストを用いて、受講者同士がお互いに手技をしている姿を確認している。

チェックリストには一つひとつの手技に対してチェック項目があるので、それが獲得できるまで学習することができる。また自分ではできたと思っていたとしても、他者評価によってできていないこともわかる。

■臨床での経験と知識を結び付けていく。

4か月後に配属された後、患者さんへのケアを始めていく中で気づきを得た際、そのことを常にフォローできるような教育システムにしていかないと、研修を開催することが目的になってしまう。後からの気づきさえもフォローできるよう、「いつでも、どこでも、誰でも」調べて学ぶことができるツールとして「ｉＰａｄ」を採用している。

〈シミュレータを使用した教育のメリットは二つ〉

一つ目は、自信がつくまで何回も反復練習できること。最近の新人看護師は、「これでいい」と言われないまま育ってきているので、自信を持っていない場合が多い。そのため患者さんへのケアで失敗した時、傷つき度具合は結構大きい。そこでシミュレータで患者さんにケアを実施する時と同じようにトレーニングをして、実際の患者さんに実施する時には「シミュレータでたくさん練習してきたのだから、患者さんにもできる。」と自信をつけてもらう。

二つ目は、また客観的に自分を見ることができること。全員が同じトレーニングをすることができるので、それを何回も見て客観視することができる強みがある。

「新人看護師研修を受けた人の中には「学生の時以上に勉強をしました。」という人もいました。でもその自信が臨床に出た時にふっとつながる結びつく瞬間があるそうで、「研修期間中は臨床での経験をすることがないので不安だったけど、臨床に出てはじめてエビデンスがあることに対する自分の強み、エビデンスの本当の意味が分かって仕事が面白い」と言ってくれる人がいると〝やった！〟と思います。」

〈経年者研修に関して〉

業務の標準化のためにも、組織的な教育プログラムの構築を考えている。ベテランになればなるほど思い込みがあるので、エラーや失敗をする傾向がある。だからこそ、経年者へのシミュレータを使用した教育は新人看護師に行うよりもさらに意義がある。ただ経年者の場合はプライドがあるので、他人に指摘されるのではなく、自分で「こっそりと」自分の姿に気づいてもらうようにする。

〈今後のシミュレータの活用目的は〉

日本の流れからいうと、これからは個人ではなくチーム力の視点が重要になる。シミュレータの活用目的も個人のスキルの向上からチーム力の向上に向けた利用方法を検討している。

現在は個人のスキル向上に使用するだけで精一杯だが、いずれは他職種連携のスキルを向上させるトレーニングを行っていくことを考えている。

中島先生と一病棟（循環器内科）のスタッフの皆様
写真左から武内和代さん，中島美津子 教育看護局長、
山口恵美子さん（新人看護師）、川田恵利子さん

〈後記〉

新百合ケ丘駅から徒歩10分、小高い丘の上に新百合ケ丘総合病院があります。病院のまわりは自然豊かで駐車場から竹林が見えました。病院を訪れた時は秋の風情を感じる風景でしたが、春になったら病室から桜を愛でることができると伺いました。患者さんにとっては、季節の移り変わりを感じてもらうことができるとても良い環境だと感じました。

中島氏とのインタビューで「繰り返しの訓練が大事。自信がつくまで何回でも練習できる。」の言葉が印象に残っています。一回だけの研修では、その時は覚えているけれど、数か月すると忘れがちになります。また臨床の忙しさを理由に、勉強が疎かになることも否定できません。臨床で気づいた事があったら、エビデンスを調べ、シミュレータを使用して再度自分の手技を確認する流れを繰り返すことによって、昨日よりも良いケアの実践につながるのだと思います。

「すべては患者さんのために」の理念に沿って、知識と実践を統合した教育が展開されていくことを、心より願います。

写真・資料提供：神奈川県 新百合ケ丘総合病院 看護部

自己アイデンティティをもった看護師を育てる

働き甲斐のある職場環境の整備と学習者自身が気づいて次の学習につなげる仕掛けづくりを

南東北グループ 教育看護局長　中島美津子氏に、誕生したばかりの南東北グループ 医療法人社団三成会 新百合ヶ丘総合病院で、グループ内の看護教育に関するお話を伺った。

〈南東北グループの概要〉

■すべては患者さんのために

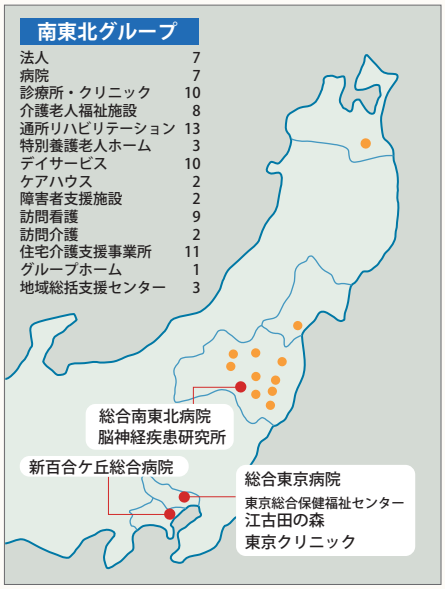
「すべては患者さんのために」を基本理念に、30年前に設立。福島県郡山市にある総合南東北病院を中心に、病院をはじめクリニック、老人介護施設などの施設を有し、保健・医療・介護・福祉の総合サービスに取り組んでいる。救急車は一切断らない方針である。

「その地域で必要とされる医療や介護を提供し続けた結果、グループが拡大していきました。」（中島氏 談）

■高度先端医療を導入

PETを用いたがん検査をいちはやく導入し、さらに陽子線治療やガンマナイフ、最新リニアック（IMRT）治療などを通して、世界でも最先端の放射線医療を実践している。

2012年6月、グループ内の医療施設である一般財団法人脳神経疾患研究所では、再発・進行がんを治療できるホウ素中性子捕捉療法装置を、世界の病院で初めて導入することを決定した。正常な細胞への影響を極力抑えつつ、外科手術や既存のX線治療では難しい再発がんや進行がんにも有効とされており、最先端がん治療への研究が開始されることとなっている。



〈新百合ヶ丘総合病院の概要〉

■川崎市の公募を受けて新設

新百合ヶ丘は、神奈川県の川崎市北部に位置し、新宿から快速急行で約20分と都心に近いことから、住宅地としても人気がある。川崎市は重症患者の救急車内待機時間が30分以上であった割合が高く、政令指定都市の中で2007年から三年連続でワースト3に入っていた。人口増加に伴い医療ニーズが急速に高まりつつある川崎市の公募を受けて、2012年8月新たに開設された。一般病床377床、30の診療科をもつ。

■救急医療とニーズの高いがん・脳疾患・心臓病を中心とした高度先進医療に注力

救急車専用搬送口の近くに小児外来を配置し、365日24時間体制で小児科・産婦人科を中心とした救急外来体制を実施。家で処置できるのではないかと思われるレベルから三次救急まで、地域の患者さんのために受け入れをしている。

院内には、臓器の機能まで確認することができるSPECTや放射線治療装置のサイバーナイフ、手術支援ロボットのダヴィンチなど最先端の医療装置や画像診断装置が導入されている。

また、定期的に医学健康講座が開催されている。各診療科の医師が地域に住む人々を対象に、最新の治療方法や生活習慣病予防などのテーマでわかりやすく話をされている。取材をした日は、『最新の白内障手術』の講座が開催されていた。「病気になってからではなくて病気になる前の予防に力を注いでいます」

■ワーク・ライフ・バランス

多種多様なライフスタイルをもつ個人の生き方に合わせて働き方を選べる制度がある。看護師として40年働く中で、ずっとフルタイムで夜勤もこなしていくのは無理がある。そんな時にはお互い様精神で実施するのがとても大事。「看護師をしてきて良かった」と思うプラス人生の成功もしてほしい。

看護師教育のモットーは trust（信頼）・modesty（謙虚）・decency（品位）

〈グループ内での看護職員教育の方針〉

人生の目標というものを考えられるような、自己アイデンティティを持った人を育てていきたい。

■看護教育のモットー

trust（信頼）	患者さんからの信頼 同僚からの信頼 自分自身への信頼 ↓ 自信が芽生える
modesty（謙虚）	常に患者さんを支援していく立場から、患者さんに対し真摯な態度で接する。
decency（品位）	自分が看護師として誇りをもって仕事を楽しめるプロであり続ける姿勢。

具体的には、看護職は科学者であることをふまえ、「臨床能力・教育能力・研究能力」の3つの輪が重なるところがケアの臨床能力が高まるところだと考え、それを実践する教育を展開している。

臨床能力は、知識だけでなく臨床の技術的な能力を高める事である。教育能力は、人間力を高め相手に教育的に関わっていくことである。研究能力は、研究的視点「クリティカルシンキング」を養うことである。

■新人看護師に関しては、5年間かけて1人前にする。

入職して3か月間はひたすら研修三昧の日々、4か月目から希望の部署に配属、そこで様々なことを経験した上で希望があれば期限を決めずに異動をするよう考えている。新人看護師の配置も教育者の都合ではなく、新人看護師の希望で実施。

子育てと同じで「あれしなさい、これしなさい」ではなく「なんでもやってみてごらん。」という姿勢で実施している。このためには受け入れ側の教育が大事。「私たちはこうだったのだから」という固定観念や既成観念、自分の価値判断基準で相手を見ないようにするよう伝えている。個人に合わせた教育をしていくには、積極的に関与しつつも、「どこができているのか」という視点で相手を輝かせるために積極的な支援が必要となる。

「看護はまじめに勉強しているだけではだめで、人格を育てるようないわゆる遊びも必要なのですよ。看護バカではだめですね。ただ人格が優しくて接遇も素晴らしいだけでも不十分で、病気の兆候を見抜けないといけない。両方必要です。」

教育への熱い思いを語る中島美津子氏